

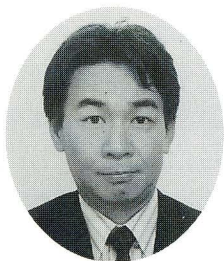
第10号

2002(平成14)年10月31日発行

神縄法政研究所報

沖縄国際大学沖縄法政研究所 所長 山城将美

〒901-2701 宜野湾市宜野湾2丁目6番1号 電話098-892-1111 内線2901~2903 直通098-893-9023



「私」の不安

所員(法学部助教授)小西由浩

「私」は不安である。新聞には毎日のように凶悪な犯罪の記事。聞くところでは、犯罪の増加のために刑務所は定員オーバーの状態にあるという。刑務所の増設も検討されはじめたらしい。ところが一方で犯罪を取り締まるべき警察の犯罪検挙率は20%を割り込んでいるという。刑務所を満杯にするほどの犯罪者がいながら、2割の事件でしか犯人が捕まっていないとは、犯罪者は世の中にもうようよいるということではないか。「世界一安全な国」といっていたのはそんなに前のことではないはずだ。その「神話」はもう崩壊してしまったのか。オヤジを“狩る”少年たち。溢れるほどのモノに囲まれながら何が足りないというのか。オヤジはオヤジで少女を買い漁る。なんということだ。

被害者学とかいう学問の研究によれば、人の感じる犯罪被害の不安と現実に被害を受ける確率にはズレがあるらしい。つまり、ある人々は犯罪に遭遇する機会が少なくても大きな不安を持つし、その逆の人々もいるという。たしかに「私」は、犯罪の発生率、どんなタイプの犯罪がどこで・どの程度発生しているのかとか、被害を受けやすい行動パターンなどについて正確な情報を持っているわけではない。とすれば「私」の不安は、マスコミなどに煽られた“モラル・パニック”によるもので、客観的な犯罪被害の確率には相応しないものなのだろうか。そうかもしれない。しかし、そんな数値の説明は慰めにならない。現に「私」はこんなに不安なのだ。

「私」は不安だ。経済のグローバル化とやらが「私」にしたことといえば、終身雇用という安定とそれと引き換えの職場への忠誠心を“忘れろ”と迫ってきたことだけだ。毎日の食卓にのぼる物さえ、「私」にはそれがどこでどのように作られたかもわからない。とにかく世の中は危険でいっぱいなのだ。「私」の不安の元が、犯罪なのか、生活の安定なのか、将来の見通しなのか「私」には区別できないけども。お偉いさんたちの口からは「自助努力」「自己防衛」という言葉しか出てこない。どうしろというのだ。

「グローバル化」は国民国家の枠を揺るがせ、中央集権的な政策の実行が進歩を促すという信仰を失わせる。そして双子のプロセスとしての「ローカル化」を進行させる。犯罪統制の分野においても“コミュニティ”をキー・ワードにした対策が、国の内外を問わず注目されている。犯罪に強い環境設計による町づくり、地域を仲立ちにして犯罪者・被害者の和解を図る「修復的司法」、住民の「不安感」の軽減に向けられた諸活動等々。不安を抱え、他人に不寛容になりつつある「私」が拠り所にできるのは、やはり身近にいる人たちなのだろう。「私」に何ができるのか、ただいま思案中である。

(こにし・よしひろ)